

## 我が人生を捧げた職業

観一・16回 中西 豊

(昭和40年卒)

万博が大阪で開かれた一九七〇年(昭和四十五年)三月に、私は関学の法学部を卒業して、大阪の天満に本社のある中西金属工業(株)に入社しました。当時の中西金属は資本金二億円、従業員約千五百人、全国七か所に工場を持つ中堅のメーカーでしたが、社名からも「町の鉄工所」というイメージがあり、下宿のおじさんから「中西さん、そんなところへ就職するのなら私が知り合いの工場を紹介してあげるの！」と言われたこともありました。

私も本当は、公務員か地元香川県の会社か都会でならせめて大会社へ就職したかったのですが、実は学園紛争時代の大学で学生運動をやり過ぎてあまり勉強をしなかつたため、そのようなところへは採用されず、中西金属にしか採用されなかったもので、とりあえず三年ぐらいはそこに勤めて、その間に別のもっといい会社をさがしたりいいだろうと思ひ、アルバイト感覚で入社しました。

その時の大学卒の同期入社は十二名いましたが、入社後三か月目ぐらいに退職した一名を除いて、全員が六十歳の定年まで勤め上げました。中西金属も最近入社している若い社員は約半数が大卒ですが、当時の社員はほとんどが高卒か中卒の人で大卒の人は一割程度でしたので全員が将来の幹部社員として期待されていたように思います。

会社は入社時には私を営業に配属しようと思ひ、まず製品や得意先などを覚えさせるために半年ぐらいの予定で営業倉庫に配属したようですが、多分、私は話下手だったので上司の営業課長だった人が私には営業の仕事は向いていないと考えたようで別の人を営業に配属し、私は数字には強いし力もあるしリフトの運転なども上手だ

ったのでそのまま営業倉庫の仕事させられることになったようでした。

入社二年目に、同じ会社で事務の仕事をしていた女性と結婚しようという約束をしたのですが、彼女から「あなたは大卒なのだからいつまでも倉庫の仕事が続けず、他の仕事に変えてもらおうように会社に頼んでみなさいよ！」といわれ、倉庫の仕事は気楽で気に入っていたのですが、仕方なく関学の先輩だった総務部長に相談に行きました。総務部長から「君はどんな仕事に向いていると思うのか」といわれて、本当は仕事の内容は知らなかったのですが「総務の仕事に向いていのではないかと思います」といったら、「本社の総務課は無理だが、工場の総務課でよければそのうち紹介してあげる」といわれました。その時に自分は会社の仕事に必要な知識や特技が何もないということに気づき、とりあえず総務の仕事に適した資格を取ろうと思い、一年ほど勉強をして行政書士と社会保険労務士という資格を取りました。入社三

年目にはその総務部長が仲人となり結婚もして、結婚二カ月後には仕事も本社の倉庫係から寝屋川工場の総務課という部署に変わりました。

寝屋川工場は従業員が三百五十人ほどの工場でしたが独立法人（中西金属の子会社）でしたので、大卒の新規採用は本社が行うのですが高卒・中卒の新規採用と中途採用とは工場が独自に行っており、私はそこで主に採用の業務を担当することになりました。

採用担当者は三名いたのですが、私は前任者が開拓した南九州の宮崎と鹿児島の中予・高校の新卒採用の仕事を引き継ぐことになり、約四年間六月ごろから九月ごろまで大阪と南九州を何回か寝台列車で行き来しました。

一九七六年に、それまで経理課の人がそろばんや電卓を使い手作業で行っていた寝屋川工場の従業員の給与計算を本社のコンピュータを使ってしようということになり、私とその業務を担当することになったので富士通へプログラムの勉強に通ったのですが、プログラムの作

成は中学時代に得意だった代数の問題を解いて行くような感じですぐに知識を習得でき、その後給与業務も担当することになりました。給与業務を引き継いだ関係で経理課の仕事にも関心を持ち、独自に通信教育で簿記の勉強をしたのですが最初は借方・貸方という簿記の原理が理解できず難しいなあと思っていたのですが、一年ほど経ったある日突然簿記の原理が分かったような気がして、それからもう必要はないと思い簿記の勉強はやめました。その後すぐタイミングよく同じ寝屋川工場の総務課から経理課に異動となり、約二年間経理課の係長として実務の責任者となり決算書の作成や資金繰表の作成や法人税申告書の作成等の業務を行いました。

一九七九年に、同じ寝屋川市にあったコレック(株)という子会社へ転勤になり、そこで総務と経理の責任者になりました。コレックは従業員が五十人ぐらいの小さな会社でしたが、バッテリー式のフォークリフトなどを作っており、製品やサービスの得意先は約二百件、部品

の仕入先も約五十件もあり、事務処理が複雑だったので、オフコンを購入して販売・仕入・経理に関するプログラムを自分一人で作り、営業・資材・経理事務の担当者にデータを入力してもらい、手作業の仕事をコンピュータ処理に切り替えて行きました。コレックで九年間勤務したのですが、従業員数が少なかったので仕事とは別に従業員から個人的に税金のことや法律関連のことや役所関係の手続きに関することなどの相談をよく受けたのですが、これが意外と自分自身の幅広い勉強にもなりました。一九八八年に三重工場に転勤になり大阪からは通勤できないので三重県の津市に住むことになったのですが、当時長男が中学二年生、次男が小学四年生だったので単身赴任をするか迷ったのですが、家族で相談した結果、全員で三重へ行くことになりました。三重工場では総務課長として仕事をしていたのですが、三年後にまた大阪の本社へ転勤にすることになり、今度は家族は三重へ残り、私だけ単身赴任することになったのですが、それ

以後今までなんと二十三年間も大阪での单身赴任生活が続いています。

一九九一年四月に本社の人事課長となったのですが、仕事の引き継ぎはゆつくりとしたらいいといわれたので、五月の末から本社へ勤務するようになりました。その年六月中旬の会社の創立記念日に西脇カントリーというゴルフ場で参加者が約百五十名という盛大な社内ゴルフコンペがありました。人事部がゴルフの事務局になっており、プレーの終了後来賓の部・シニアの部・女性の部・全員の部と四種類の成績表を作り、各順位の発表と優秀賞・ベストグロ・ブービー・飛び賞・大波小波賞などの表彰をするのですが、手作業では大変だからパソコンを持ち込んで成績表を作ろうとしたが、過去二年失敗をしたという話を聞いたので、まだ仕事が暇でしたからその年は私が仕事中にプログラムを作って事前に参加者の情報やゴルフコースの情報を入力しておき、当日は人事部の女性社員が二名受付をしていたので、彼女たちに全員の

スコアをパソコンに入力してもらいました。最後の人のスコアの入力が終われば、多分手作業でやれば四〇五名で作業しても少なくとも三十分以上はかかると思われる成績表の作成がパソコンなので無人で二〇三分ですべて印刷もでき、みなさんが風呂からあがって食事を始める前に成績表をコピーして全員に配布でき満足してもらえました。当日の商品は豪勢で、例えばシニアの部では対象者約十五名のうち上位五名は画王という当時数十万円はしたと思われるテレビをもらっていて、私は参加賞しかもらえなかったので年寄りには得だなあと羨ましく思いました。ただし、これが私が会社で作ったコンピュータの最後のプログラムになりました。

本社への転勤後、「少し人事制度の勉強をさせて欲しい」といったら、人事部長から「勉強のためならお金はいくら使ってもいい」といわれたので、二年間ほど大阪や東京などで開催されていたセミナーに出席したり、専門書や雑誌を読んだりして人事制度の勉強をさせてもら



中国大連工場設立当時、従業員と日本からの出張者(ネクタイ)。  
筆者は左から6人目(チョッキ姿)

いました。一九九三年ごろから中西金属の人事制度の見直しを始め、就業規則類の改定、海外勤務規定類の改定、管理職層への目標管理制度の導入、複線型昇進制度の導入、フレックスタイム制度の導入などを行いました。

一九九六年にフィリッピンのセブ島に従業員百人程度（現在は約七百人）の子会社を作ることになり、現地管理職の採用や現地就業規則類の作成や出向者の社宅の確保などの業務で、一回一〜二週間、年五〜六回程度のペースで現地へ出張に行きました。二〇〇三年には中国の大連に従業員

五十人程度の子会社を作ることになり、同じく現地社員の採用や就業規則類の作成などの業務のため二カ月に一回程度のペースで出張をしていました。ところが二〇〇三年十月の五十七歳の時に受けた会社の健康診断の結果消化器系の再検査が必要といわれ、会社の医務室の人から早く再検査を受けるようにといわれていたのですがちやうど大連の件などで仕事が忙しい時期だったので受診を伸ばし、二〇〇四年四月に再検査を受けたところ食道がんで手術が必要で、さらに手術をした後の五年間生存率も約五十パーセントと分かったので大連での私の仕事は終結させて病気の治療をすることになりました。

当時、私は人事部長になっていたのですが、当分満足な仕事はできないだろうと思ったので人事部長は退任して六月に大阪の成人病センターに入院して手術を受けました。手術は午前九時に始まり終わったのは午後十時三十分と十三時間三十分もかかったそうで、病院の手術者家族用の待合室で待機していた家族はいつ終わるのかと

心配していらいらしていたそうです。入院前には、ひよつとすると今がこの世の見納めになるかも分からないので悔いが残らないようにしようと思いい、若い時に好きだった音楽のテープを買って聞いたり近くの城北公園や中之島公園などへきれいな花を見に行ったりしていました。

十月末にようやく退院してしばらく自宅療養をしましたが、退院した当時、体は痩せて抗がん剤の副作用で髪の毛も抜けてみすばらしい感じで、これまで仕事を通して身につけてきたと思っていた自分の知識も世間で通用するのかと自信がなくなり、これからも仕事を続けられるのかと不安になったのですが、法務検定という資格試験があることを書店で知り、自分の知識がどの程度か知りたくて自宅療養中にその試験を受けてみました。後日送られてきた成績通知を見ると、受験者の平均点は約六十三点、合格点は七十点で合格率は約三十パーセント、私の成績は九十二点で合格していました。それからしばらくして会社に復帰すると法務室という部署へ変えてもら

い、途中で定年も迎えましたがそのまま二〇〇八年までの四年間法務室長として勤務しました。その間、五十八歳から六十一歳にかけて法務検定、ファイナンシャルプランナーの国内資格（AFP）、国際資格（CFP）、特定社労士と毎年続けて受験して資格を取っていたので、そのころにヤフーのブログに「還暦の受験生」という名前で登録し、以後月一回程度、法律・人事労務・税金・保険・歴史・健康・趣味などに関する記事を投稿しました。

中西金属は当初三年間ぐらいだけ勤めるつもりでしたが、その後も二〇〇八年から三年間は常勤監査役として勤め、二〇一一年から常勤の顧問となり、二〇一三年からは非常勤の顧問となり、現在までなんと四十四年間も連続してその会社に勤めています。

なお、最近は大阪府工業協会という中西金属とは別の機関から依頼されて海外人事などに関するセミナーの講師をすることもあります。